

清代における言語接触

鋤田 智彦 (岩手大学)

はじめに

清朝は中国最後の王朝として知られるが、その支配層は漢民族ではなく、中国東北部や沿海州に居住していた満洲族である。満洲族は清朝建国期には当然のように満洲語を話していたが、中国支配が続くに従ってそのほとんどが漢民族の中国語を話すようになった。本稿では漢民族の話す中国語に対して、その存在すらあまり知られていない満洲語についてまず概説を行い、引き続き、それぞれの言語が接触により相互にどのような影響を及ぼしあったのかについて述べたい。

1. 満洲語について

1.1 満洲語とは

満洲語はアルタイ諸語とまとめられる諸言語のうち、ツングース語族に分類される。語順や音韻上の制約など、日本語とも似ている点も多い。例えば、以下は『三国志演義』の初めての外国語翻訳に挙げられる、『満文三国志』(1650序)の第1回から第3回の題名である。

abka na de weceme tooro yafan de jurgan -i hajilaha.¹

天 地 に 祭 り 桃 園 で 義 の 誓 い を 立 て た。(第1回)

lio hiowande hūlha be wafi gung ilibuha.

劉 玄 徳 賊 を 殺 し 功 立 て た。(第2回)

an si bade jang fei. du io be tantaha.

安 喜 という 所 で 張 飛, 督 郵 を 打 っ た。(第3回)

これらのうち、「劉玄德」「功」「安喜」「張飛」「督郵」はいずれも漢語の音写であるが、語順は明らかに漢語と異なり、上のように逐語訳すればそのまま日本語として通じることも多い。一方、中国語での原文は以下の通りである。

¹ 本稿では Möllendorff による転写法に若干の変更を加えた方法でローマ字転写を行う。変更点は以下の通り。1. 漢語音節表記用の附加記号を「から」とし、2. 独立した音節をなす dz を dzy, ts' を tsy とし、3. 子音字 ts' の'を取り去り、4. 日本語の「～の」に当たる i を -i とする。

祭天地桃園結義 (天地を祭り桃園で義を結ぶ)
劉玄德斬寇立功 (劉玄德 寇を斬り功を立てる)
安喜張飛鞭督郵 (安喜にて張飛 督郵を鞭うつ)

このように見れば、動詞と目的語の順、一部の助詞など、満洲語と日本語の類似性は明らかである。しかし当然ながらこのことで決して満洲語と日本語が同根、あるいは系統関係にあると主張するわけではない。また、満洲国時代には通用していた中国語のことを同様に満洲語と表記する場合があるので、この点には注意が必要である。

1.2 満洲文字

満洲語を表す文字としては、満洲文字が挙げられる。満洲文字は縦書きのウイグル式モンゴル字を改良して使われるようになった。満洲文字が作られる前は、満洲人たちは外国語であるモンゴル語で記録を残していた。満洲文字の使い始めについては以下のような話が伝わる。少々長いがここでも逐語訳を試してみたい。

taidzu sure beile monggo bithe be kūbulime. manju gisun -i araki
太祖 スレ ベイレ²が モンゴル 文 に 変えて、満洲 語 を 書きたい
seci. erdeni baksi. g'ag'ai jargūci hendume. be
と言ったところ、エルデニ バクシ³、ガガイ ジャルグチが 言うには、我ら
monggoi bithe be taciha dahame sambi dere.. julgeci jihe bithe be
モンゴルの 文 を 学んだ ため 知る のある。昔から 伝わった 文 を
te adarame kūbulumbi seme marame gisureci taidzu sure beile
今 どうして 変えさせるのか と 拒んで 話したところ 太祖 スレ ベイレが
hendume.. nikan gurun -i bithe be hūlaci. nikan bithe sara niyalma.
言うには、漢人の 国 の 文 を 読みあげれば、漢 文 を 知る 人、
sarakū niyalma gemu ulhimbi.. monggo gurun -i bithe be hūlaci..
知らない 人も 共に わかる。モンゴルの 国 の 文 を 読みあげれば、
bithe sarkū niyalma inu gemu ulhimbi kai.. musei gurun -i
文 を 知らない 人 もまた 共に わかる だろう。我々の 国 の
gisun -i araci adarame mangga.. encu monggo gurun
言葉 を 書くことは どれだけ 難しいだろうか。異なる モンゴル 国
-i gisun adarame ja seme henduci.. g'ag'ai jargūci.
の 言葉は どれだけ 易しいだろうか と 言えば、ガガイ ジャルグチと、
erdeni baksi jabume.. musei gurun -i gisun -i araci sain mujangga.
エルデニ バクシ 答えるに、我々の 国 の 言葉 を 書けば 良い に 違いない。

² スレ ベイレ：スレ (sure) とは「聡明」、ベイレ (beile) とは爵位の名である。ヌルハチのこと。
³ バクシ：中国語の「博士」がモンゴル語に伝わり、さらに満洲語に取り入れられた言葉で、一種の敬称である。次のジャルグチは、裁判官を表すモンゴル語に由来する。

としては、黒竜江省に多く見積もっても数十人と言われる、いわゆる「危機言語」の一つであり、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）のデータによれば、満洲語（黒竜江）および満洲語（嫩江）の話者はそれぞれ十人程度である⁴。このような中、言語保護の機運は高まりつつあり、満洲語話者が残る黒竜江省富裕県三家子村などでは初等教育に満洲語教育が組み入れられているが、その消失に対する力は極めて限られたものである。このような満洲語は満洲語口語と言われる。

1.4 満洲語とシベ(錫伯)語

以上で見たように、現代において満洲語口語は極めて危機的な状況にあるが、満洲語と関係の深い言語が他の地域に残っている。シベ語（あるいはシボ語とも）と呼ばれる言葉がそれで、現在では新疆ウイグル自治区などに住むシベ族によって話される。満洲族に從っていたシベ族は満洲語系統の言語を話すようになり、18世紀半ばの乾隆帝の時期には元々居住していた中国東北地方から新疆へと辺境警備のために集団で移住した。新疆のシベ族はその子孫である。東北地方に残ったシベ族は漢語話者となったが、新疆でシベ語が受け継がれた。現在のシベ語話者は3万人ほどであり⁵、文字は満洲文字を僅かに改良したシベ文字が用いられる。シベ語は現代に残る満洲語方言であると言える。

1.5 満洲語と女真語

上で述べたシベ語が現代に残る満洲語の一側面を示しているとするれば、歴史的に満洲語と関係の深い言語として女真語を挙げることができる。女真語は中国東北部で活動していた女真族の話していた言葉である。女真族は中国の北方に進出し、12世紀前半には当時の宋朝を南遷させた金朝を打ち立てた民族として知られる。女真語は近代及びその後の明代の碑文や文献に残されている。女真語と満洲語の類似性については、以下の様な例を挙げられる。(津曲 2002 より)

女真語：abka-i fujile taipin-be dondi-bi.

満洲語：abka -i fejile taifin be donjimbi.

日本語：天の下 太平を聞く。

満洲語の *ji*, *fi* に対し、女真語では *di*, *pi* が対応しており、これらはそれぞれ古い音節の形であると考えられている。そして、女真語は漢字を模して作られた女真文字で記された。女真文字には大字と小字があると言われるが、それぞれどの文字を指しているのかは不明であり、女真文字については全て解読されたわけではない。なお、女真文字については『吾妻鏡』にも記載が見られる。貞応三年（1224）二月廿九の出来事として、越後国寺泊に漂着した舟に乗っていた高麗人の所有物の一つに見たことのない四文字の記された簡

⁴ UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger (<http://www.unesco.org/languages-atlas/>)

⁵ Ethnologic Languages of the World (<https://www.ethnologue.com/language/sjo>)

(ふだ)があったという。「彼の帯の中央に銀の簡(長七寸, 広さ三寸, 方なり)を付け, その中に銘を注すること四字なり。(略)四字の銘においては, 文士の数輩, 参候せしむと雖も, これを読む人なし」とある。以下の四字である。

トイ 女真族

(早稲田大学所蔵, 寛永三年跋本『新刊吾妻鏡』巻二十六より)

後の考証により, 後ろの三字が「国の誠」(guru-un ni xada-un)を表す女真文字であったことが証明された。また, 他に女真族と日本との関わりを言うと, 寛仁三年(1019)に起きた「刀伊の入寇」で壱岐や対馬を襲撃した「刀伊」とは女真族のことであり, それを指す高麗語の蔑称「トイ」を日本の音読みで当てた表記である。

現在では女真語は古い時期のツングース語を知るための数少ない手がかりの一つであると言える。

1.6 満洲語と日本

満洲語は清朝における公用語の一つであったが, 一部の例外を除いて漢人が学習することは禁じられており, 日清間の交流はそれまでと変わらず漢字を通じて行われていたため, 当時の日本では満洲語に対する理解はあまり進まなかった。そのような中でも荻生徂徠が『満文考』を記すなど, 全く意識が向けられなかったわけではない。その後本格的に満洲語に対する研究が進められたのは, 19世紀始めに至り, ロシアの使節レザノフがロシア語の国書と日本語と満洲語で書かれた訳文を幕府にもたらしたことをきっかけとする。この時日本語以外に満洲語が用いられたのは, ロシアでは日本でも満洲語が通じると思われていたためである。しかしながら当時日本にはロシア文と満洲文を読める人材がおらず, また, 添えられた日本文は文字は読めても文章の体をなさず解読ができなかったため, 結局はロシア文をオランダ語に訳し, さらに和訳することにより内容を理解するに至った。そしてこの出来事をきっかけとし, 幕府は天文方の高橋景保と長崎唐通事に満洲語の学習を命じたという。高橋景保は幕府より満洲語辞典『御製増訂清文鑑』を与えられ, それをもとに満洲語研究を進め, やがて国書の満洲文からの和訳である『魯西亜国呈書満文訓訳強解』を完成させた。彼はその後もさらに満洲語に対する理解を深めてゆき, 満洲語に関するいくつかの著作を世に出し続けたという。一方で, 長崎唐通事もそれに遅れて『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』『翻訳満語纂編』を作り上げた。これらの経緯については, 松岡 2013 に詳しい。

1.7 満洲語と朝鮮

日本に比べ, 朝鮮では地続きであるという地理的な要因から, 満洲語に対してはより注意が払われていた。朝鮮王朝で通訳員の養成が行われていた司訳院において, 最も規模の

大きかった漢学（漢語）の他に、蒙学（モンゴル語）、倭学（日本語）とあわせて清学（満洲語）の教授が行われたことにそれが現れている。なお、清学にはその前身として女真学（女真語）が存在し、清朝成立以前より女真語の教育が行われていたことが窺い知れる⁶。教材としては司訳院で編纂された漢語教科書『老乞大』の満洲語翻訳である『清語老乞大』や前述の『満文三国志』のいくつかの場面を抜き出してまとめた『三訳総解』（ともに1703原刊）などがある。満洲語辞典としては『同文類解』（1748）や、『御製増訂清文鑑』にハングル注音を加えた『漢清文鑑』（1775年頃）が刊行された。司訳院においては他にも多くの満洲語書籍が作られた。

2. 満洲語における漢語からの影響

これまで満洲語そのもの及びその周辺言語との関わりを見てきたが、以下からは特に満洲語と漢語の言語接触に焦点を当て、それぞれの影響を見てみたい。実際に最も大きくかわわるのは語彙の部分である。まずは満洲語における漢語からの語彙借用の例を挙げる。

2.1 漢語由来名詞

満洲語に取り入れられた漢語語彙は名詞がそのほとんどを占める。1.1で挙げたような音写以外にも、一般名詞として使用されていた語彙としては以下のようなものがある。ここでは『満文三国志』に現れるいくつかの例を挙げ、用例と共に見てみたい。

a) *kiyoo* : 漢語「橋」より

dzy lung kiyoo -i hanci isiname niyalma, morin gemu šadahabi. tuwaci jang fei gida jafafi morilahi kiyoo -i ninggude ilihabi. (第83回)

子龍（趙雲）が橋の近くに近づくころには人馬共に疲れていた。見れば張飛が槍を手に取り馬に乗り、橋の上に立っていた。

（子龍已到橋邊，人困馬乏，見張飛挺鎗立馬於橋上。）

迫り来る曹操軍に対し、張飛が一人で長坂坡に立ち、主君である劉備の子を救い逃れてきた趙雲を待ち受ける有名な場面である。ここに見られる *kiyoo* は漢語「橋」に由来し、一般名詞として用いられている。満洲語辞典として早期のものであると言える『大清全書』（1683）には、「橋」としてこの語が収められている。一方、満洲固有語としては *tuhan* 「獨木橋」も見られるが、この語は『満文三国志』には見られない。このような中国文化とは直接関わらない語にも漢語由来の語彙が見られる。

b) *yamun* : 漢語「衙門」より

jang fei ambula jili banjifi. yasa muheliyeken neifi, weihe saime morinci fekume ebufi yamun de

⁶ 朝鮮王朝の法典『経国大典』（1485）の「礼典」に「女真学」の名が見られる。

dosime generede, duka jafaha niyalma sabufi gemu goro jailaha. jang fei sujume amargi yamun de dosifi tuwaci. du io yamun de tehebi. yamun -i urse be huthufi na de maktahabi, jang fei den jilgan -i esukiyeme irgen be jobobure hülha. si mimbe takambio. (第3回)

張飛は大いに怒り、目を丸く開き、齒を噛み馬から飛び降り**役所**に入っていくと、門を持った人⁷は見て皆遠くに逃れた。張飛が走って後ろの**部屋**に入り見れば、督郵は**部屋**の中で座っていた。**役所**の大勢の人間を縛り上げ地面に放り投げ、張飛は大きい声で怒鳴りつけた。庶民を苦しめる賊め、おまえは俺を知っているか。

(張飛大怒，睜圓環眼，咬碎鋼牙。滾鞍下馬，逕入館驛，把門人見了。皆遠遠躲避。直奔後堂，見督郵坐于廳上。將縣吏綁倒在地，飛大喝。害民賊，認得我麼)

やや長い引用となったが、yamun という語が多く見られる場面である。この yamun という語は漢語の「館驛」(役人が出張時に利用する宿舎)、「堂」，「庁」(執務室)、「県吏」の訳語として用いられている。「衙門」とは役所を表す言葉であり、満洲語では一般的な概念として定着し、様々な漢語に対してもはや満洲固有語と同様に自由自在に使われていることがわかる。

c) taigiyan / taigiyasa : 漢語「太監」より

ilga yafan -i dorgici g'ao šeng gebungge taigiyan tucifi. jiyān siyo be sacime wafi uju be faitame gaiha. jiyān siyo -i cooha gemu dahaha. yuwan šoo, ho jin -i baru hendume, taigiyasa gemu hoki jafaha bihe. wacihiyame waci acambi. (第4回)

花園の中から郭勝という名の**宦官**が出てきて、蹇碩を斬り殺し、頭を落とし取った。蹇碩の軍は皆降伏した。袁紹が何進に向かい言った。**宦官**たちはみな徒党を組んでいたもので、全て殺すべきである、と。

(花陰下轉過中常侍郭勝，一刀把蹇碩翻，割頭而去。碩所領禁軍，盡皆降順。紹與何進曰，中官結黨，可盡誅之)

元々の漢語「太監」は宦官を指す言葉である。ここでは宦官の職名の一つ「中常侍」、また、宦官の別称である「中官」に対応している。ここで注目すべきは後者が taigiyasa という形で訳されていることである。この taigiyasa の -sa という形は複数を表す満洲固有語の接尾辞であり、例えば固有語である amban 「大臣」と ambasa 「大臣たち」と同一の形を取っている。このような状況は、taigiyan という言葉が更に深く満洲語に入り込んでいることを意味していると言える。実際にこの taigiyan という言葉は先に取り上げた女真語にも取り入れられており、それが引き継がれた語であると見られる。

d) hiyoošun / hiyoošungga : 漢語「孝順」より

han' dzung wang bithe be tuwame wajifi ambula golofi hendume. suwe mimbe tondo hiyoošn akū niyalma obuki sembio. (第160回)

漢中王(劉備)は書を読み終えると大いに驚き言った。そなたたちは私を忠**孝**のない人と

⁷ 「把門人」とは門番のことを指す語であるが、満洲語では逐語訳している。

したいというのか。

(漢中王覽畢，大驚曰，卿等欲陷孤為不忠不孝之人耶。)

lang yei nan yang ni ba -i niyalma. cūn cio bithe be hafukabi. eme de hiyoošungga, hala ju g'o. gebu jin. tukiyehe gebu dzy ioi. (第 57 回)

瑯琊南陽の地の人で、春秋の書に通曉しており、母に孝行な人である。姓は諸葛、名は瑾、字は子瑜。

(明左氏春秋，事母至孝。瑯琊南陽人也。覆姓諸葛，名瑾，字子瑜。)

元の漢語「孝順」(孝行する)に基づくのが hiyoošun である。原文の「忠孝」の「忠」については tondo という固有語で訳しており、「孝」とは非対称的である。もう一つの hiyoošungga はその hiyoošun に「~のある，をもった」という意味を表す -ngga という接尾辞が加わり縮約が起こった形である。これも c) で見たのと同様に、本来は固有語に付くものである。例えば、固有語には gosin 「仁愛」，gosingga 「仁愛のある (人)」という語がある。

2.2 漢語由来動詞

2.1 では漢語由来の名詞を見てきたが、一部の名詞には固有語と同様な接尾辞が後続し、より満洲語固有語彙に近い形で使われた語彙があることにも触れた。名詞以外にも、日本語における漢語サ変動詞のような語彙も満洲語にはいくつか見られる。続いてはそれについてもその用例をいくつか列挙しておく。

e) šangnambi : 漢語「賞」より

cenghiyang ume kenehunjere. meni juwe nofi urunakū jeo ioi. jug'oliyang ni uju be gaifi gajire. tsootsoo ujeleme šangnaha. (第 92 回)

丞相(曹操)決して疑うなかれ。我ら二人(蔡和、蔡中)は、必ず周瑜、諸葛亮の首を得てこよう。曹操は重く賞した。

(丞相勿疑，某二人必取周瑜諸葛亮之首級。操重賞)

f) fungnemi : 漢語「封」より

tereci tsootsoo, sy ma i gisun be donjifi geren hafasa -i baru hebešefi. sun cuwan be biyoo ci jiyangjiyūn nan ceng heo fungnefi. jing jeo -i ejen obume tere inenggi uthai sun cuwan be fungneme dergi u gurun de elcin takūraha. sun cuwan fungnehe hafan be alime gaifi. uthai biyoo bithe wesimbume kesi de hengkileme elcin takūrafi ioi jin be benebuhe. (第 156 回)

それより曹操は司馬懿の言葉を聞き諸官と協議し、孫権を驃騎將軍南昌侯に封じ、荊州の主とし、その日すぐに孫権を封じるよう東呉国に使臣を遣わした。孫権は封じた官を受け取り、表を上奏し恩に叩頭し使臣を遣わし于禁を送らせた。

(却説，曹操聞司馬懿所言封孫權一節，遂從之。乃與多官商議，封孫權為驃騎將軍南昌侯領荊州牧。即日遣使，往東呉封權)

g) hokilambi : 漢語「夥計/伙計 (仲間)」より

u kuwang den jilgan -i hendume. si taigiyasa -i emgi hokilafi ahūn be waha ho miyo wakao. (第5回)

呉匡は大きい声で言った。おまえは宦官たちと一緒に仲間となって兄を殺した何苗ではないか。

(呉匡大呼曰，是車騎何苗，同謀殺兄)

h) yangselambi : 漢語「様子」より

tsootsoo uthai wang yūn -i juleri gashūha manggi. wang yūn boobai loho ganafi tsootsoo de buhe. tere loho golmin emu cy funcembi. nadan hacin -i boobai sindame yangselahabi. (第8回)

曹操がそこで王允の前で誓うと、王允は宝の剣を取ってきて曹操に与えた。その剣は長さ一尺余り、七種類の宝を置いて様子を作って(装飾して)あった。

(操遂言誓於允前，取七寶刀於操。其刀長尺餘，七寶嵌飾)

i) yooselambi : 漢語「鑰子」より

neifi tuwaci, dolo emu ajige fulgiyan hiyase bi. aisin -i yoose yooselahabi. murifi tuwaci, emu gu -i doron bi.

開けてみると、中に一つ小さな赤い箱があった。金の錠でかぎがかけられていた。こじ開けてみたところ、玉の印があった。

上に挙げた5例のうち e, f は「漢語」+na/ne (動詞化接尾辞)+mbi (終止形) という構造であり、g, h, i は「漢語」+la (動詞化接尾辞)+mbi (終止形) という構造であると解釈できる⁸。いずれも固有語の造語法に基づいていることが明白である。固有語として na, ne, no としては例えば kūrca「黒ずみ」と kūrcanambi「黒ずむ」、heye「目やに」と heyenembi「目やにが出る」、bodon「計略」と bodonombi「各々画策する」がある。また la, le, lo としては例えば aba「狩り」と abalambi「狩りをする」、leolen「議論」と leolembi「議論する」、doron「礼」と dorolombi「礼を尽くす」などがある。

3. 漢語における満洲語の受容

現代中国語に残る満洲語の影響は極めて限られる。そのうちでも有名なものの一つとしては、菓子の一つである「薩其馬 sàqímǎ」(あるいは「沙琪瑪 shāqímǎ」などとも⁹)であろうか。これは満洲族の菓子である sacima に基づいた語であり、それが清代に中国全土に広

⁸ 動詞化接尾辞の母音 a, e は母音調和により選択される。他にも o を取る場合もある。これは一般の動詞の語尾も同様である。

⁹ sacima の表記には「沙琪瑪」「沙其馬」などいくつかの種類が見られる。このように漢字表記に揺れがあるのは外来語由来であり、音訳語であるためである。

がり食べられるようになったという経緯による。この語は現代中国で権威があるとされる『現代漢語詞典』（第6版）にも満洲語由来語彙として以下のように収められている。

h) 萨其马 (Sàqímǎ) : 「薩其馬」満洲語 *sacima* より

名 一种糕点，把油炸的短面条儿用糖等黏合起来，切成方块儿。[满] (一種のお菓子。油で揚げた短い麺を砂糖などと混ぜてこねあげ，四角く切る。[満洲語由来])

この辞書には他に以下のような語彙を満洲語由来として収めている。

i) 格格 (gégé) / 格格 (gēgē) : 「格格 / 格格」満洲語 *gege* より¹⁰

满族对公主和皇族女儿的称呼。(満洲族の王女あるいは皇族の娘の呼称)

h) 哈士蟆 (hàshimá) / 哈什蚂 (hàshimǎ) : 「哈士蟆 / 哈士蟆」満洲語 *hasima* より

名 蛙的一种，身体灰褐色，生活在阴湿的地方。雌性的腹内有脂肪状物质，叫哈士蟆油，可入药。哈士蟆是我国特产的动物，主要生活在东北各省。也叫哈什蚂。[满] (蛙の一種。体は灰褐色で，暗く湿った場所に生息する。雌の腹の中には脂肪状の物質があり，哈士蟆油と呼ばれ，薬にできる。哈士蟆は我が国固有の生物であり，主に東北の各省に生息している。哈什蚂ともいう。[満洲語由来])

j) 萨满教 (Sāmǎnjiào) : 「薩滿教」，「薩滿」は満洲語 *saman* より

名 一种原始宗教，相信万物有灵和灵魂不灭。流行于亚洲和欧洲的北部等地区。萨满是跳神作法的巫师。[萨满，满] (一種の原始宗教。万物に霊と靈魂があり不滅であると信じている。アジアと欧州の北部などの地区に流行している。シャーマンは踊り神がかりをする巫 [薩滿は満洲語由来]¹¹)

辞書の記載から見れば，以上のようなごく狭い範囲での語彙でしかないが，愛新覚羅瀛生 2004 では「北京語の中の満洲語語彙」として 82 語を挙げている。ここではそのうち満洲語語彙とは普段認識されていないが，比較的常用される語彙をその説明と共に二つほど取り出してみたい。

k) 率 / 帅 (帥) (shuài) : 満洲語 *šuwai* より

満洲語 *šuwai* は「体がほっそり高い」と解釈され，「上品である」「すらりとまっすぐ立つ様子」という意味がある。『新華字典』p.433 には，「率」には「美しい」「洒脱である」とあり，「这字写得真率（この字は本当に格好良く書かれている）」という例文が載せられ

¹⁰ 元となった満洲語語彙については論者が補った。また，語釈の日本語訳は論者による。

¹¹ 『現代漢語詞典』では「薩滿」を満洲語由来としているが，この語は実際には満洲語に限らずツングース諸語に共通した語彙が見られる。日本の外来語の「シャーマン」は同源の語彙がロシア語経由で取り入れられたものである。

ている。北京語では「率」は「美」とは異なり、それと比べると更に深い意味を持つ。

l) 哈喇 (hāla) : 満洲語 har より

満洲語 har は「ツンとした匂いが鼻をつく」という意味である。北京語では油脂の類あるいは油で揚げた食品がしばらく放って置かれて異臭を放つことを hāla という。例えば「那个油饼儿搁了三天了, 都 hāla 啦 (その中国式揚げパンは三日間置きっぱなしで, すっかり変な匂いがするようになった)」

これらはいずれも擬態語であり, また口語語彙であると言われるが, 現代でも常用される語句である。先ほど挙げた『現代漢語詞典』では満洲語との関係は言及されていない。満洲語は日本語と同様に擬態語が発達した言語である。これが擬態語が少ないと言われる中国語に取り入れられ, 使い続けられている状況は理解しやすい。そして以下は方言としての北京語口語語彙である。そのため一般的に漢字表記はなされない。

m) wāhang : 満洲語 wahan より

満洲語 wahan は衣服の「袖口」の意味である。北京旗人は喪服の袖を青色で縁取りしたものを wāhang と呼んだ。建州語 (論者注・満洲語の建州方言) の n は北京の満洲語では ng 音で読まれたため, wāhang と読んだ。これは北京旗人の言葉であるが, 早いうちに北京では広く使われるようになり, 旗人, 漢人の区別なく皆が用いた。

n) kuācha : 満洲語 kūwacarambi より

満洲語 kūwacarambi は「内側にえぐる」という意味である。例えばあるものを一層一層と削ることをいうときに満洲語ではこの言葉を使う。北京語に入り, 全く同じ意味を表す。北京語では道具を用い, あるいは手で「削る」ことを kuācha という。「飯都糊在锅底上了, 快拿铲子 kuācha kuācha¹²吧。(ご飯が鍋の底にくっついてしまった。早くへらで kuācha してみなさい)」

o) chǎngkǎir : 満洲語 cangkai より

満洲語 cangkai は「ひたすら」「気のままに」「好きなように」「限りなく」を表す。北京語では「好きなように」「気ままに」「目一杯」を表すときに chǎngkǎi, またしばしば r 化して chǎngkǎir という。例えば「这儿有的是点心, 你 chǎngkǎir 吃。(ここにはいくらでもお菓子があるから, chǎngkǎir 食べて)」など

いずれも北京語語彙として使われ, 「普通話」(標準語) としては認められていない。しかしながら, 名詞のみならず動詞, 副詞なども口語として北京語の中に取り入れられてい

¹² kuācha kuācha という動詞の繰り返しは漢語固有語に見られる試みなどをあらかず動詞の繰り返し型と同一である。例えば「商量商量吧」(相談してみなさい) など。

た様子的一端を垣間見ることができるだろう。

おわりに

満洲語は清朝を作り上げた満洲族の言葉であるが、中国支配を続けていくうちに満洲族自身が満洲語を忘れ、漢語を話すようになっていった。清朝最後の皇帝、溥儀が話せた満洲語は臣下に「立て」と命令する *ili* という言葉だけであったという逸話も伝わる。そうではあっても、少なくとも清朝初期には満洲人はみな満洲語を第一言語として話しており、その状況が一日にしてひっくり返ったのではないことは間違いない。その段階を考えてみると、先に満洲語が漢文化に触れ、満洲語内に漢語由来の語彙が取り入れられ、清朝が成立した後は漢語が満洲語と接触することにより満洲語由来の語彙が漢語に取り入れられたと考えられる。そして本稿の後半では主に語彙の面からその接触について論を進めたが、なにも影響は上に見た語彙に限ったものではない。これまで満漢資料については言語資料としては手つかずの部分も多く存在する。今後は新たな資料の発見を含め、その有効な活用が期待される。

参考文献

- 愛新覚羅瀛生 2004 『満語雑識』, 学苑出版社, 北京。
津曲敏郎 2002 『満州語入門 20 講』, 大学書林, 東京。
松岡雄太 2017 『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程, 『長崎外大論叢』第 17 号 (別冊), pp.60-pp.80

本稿は平成 30 年 (2018) 3 月 16 日に開かれた岩手大学人文社会科学部創立 40 周年記念国際シンポジウムにおいて筆者が行った口頭発表に基づくものである。